
I S インフィニット・ストラトス Revolution 転生者の意思(仮)

ヴァン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス Revolution
転生者の意思（仮）

【Nコード】

N5690T

【作者名】

ヴァン

【あらすじ】

主人公最強ものです

文才が無い作者なので駄文と思いますがよろしくお願いします。

とりあえず、がんばって書くぞー

A c t - 1 (前書き)

とりあえず、1話できた・・・

Act - 1

気がつけば俺は真っ白な廃墟にいた。

・・・って言うか、此処どこだよッ！

俺は確か・・・ダメだ、思い出せない。

・・・休日で出かけていたことは覚えているけど。

ダメだ、やっぱり思い出せないな・・・。

IS インフィニット・ストラトス とブレンパワード、ガンダム
SEED&SEED DESTINY、ガンダムOO&劇場版ガン
ダムOO＼A w a k e n i n g o f T r a i l b l a z e r
＼、SRW O Gジ・インスペクターの小説やマンガやDVD／ブ
ルレーイを買って、プラモも同じくブレンパワードとガンダムX、
W、SEED&SEED DESTINY、OOの主人公達が使う
機体を買ったことまではしっかり覚えているが・・・。

・・・そういえば俺、アホみたいにお金使っていたよな。

いくら貯めても、なんか衝動買い・・・ヤメよ、なんか思い出して
いるとすごくむなしいや。

それより、さっさと此処から出るか・・・

「待ちたまえ、少年」

ん〜でもこんな場所、家の近くになかったよな・・・？
もしかして・・・。

「おい、その少年」

「ん？俺？？」

「そうだ」

「・・・誰だ、あんたは」

「私はアンドリユー・バルドフィールドだ」

「うそだっ！？絶対違う！！死んでも違うッ！！」

「冗談だ」

初対面の奴に冗談言っなよ、オイ・・・。
こいつ、頭がいつてんのか？

「私は・・・君達から見れば神に値するものだ」

ああ、かわるのやめておこう・・・。
頭、いっちゃっているからな・・・。

「そんなことはない。では証明してご覧に入れよう。御崎 タカヤ」

・・・ハイ？って何で俺の名前知ってんのオ！？

「その一、小学生のときに幼馴染のガンダム好きに影響されガンオ
タになる」

「きゃー」

「その二、高校生になって学際ではしゃぎハメを外しすぎて学校の
壁を壊したな？しかも窓ガラスを計20枚・・・」

「きゃー、きゃー、きゃー」

「お前は彼女に秘密がばれちゃ「ぎゃああアアアア！」・・・
なに死にそうな声だしてんだ？」

きさまのせいだっ！！

「と、すでに死んでるから恥ずかしくないぞ？少年」

「何言・・・ってなんだとっ！？」

「少年、いやタカヤ君、君はすでに死んでいる。と、言った」

「・・・なんで？」

「いや、暇だからゴロゴロしていたら、なんかの拍子にコピー
メーカーに当たってこぼれたら、ちょうど開いていた少年のページ
にかかってしまったんだよ。それで使い物にならなくなって、結局
少年が死んでしまった」

ひ、ひでえ・・・

「ってアンタのせいだろうがああああっ！！」

「そう怒るな、どうせ嫌でも転生するはめになるから」

「はい？」

「暇つぶしで」

暇つぶしって・・・いや、転生はうれしいんですけど・・・。

「まあ、責任は一応感じているんでね」

一応かい！？

「・・・まあ、そういうことでサービスで少年にご希望の能力や何やらやるう。なんなら、魔改造やチート化もありだ」

「イッヤッホウー！」

思いつきり拳を天に挙げる。

我ながら現金な奴だな、俺は・・・。

「そうだな。まあそれは置いてくとしてどうする？」

「ん、純粹種のイノベーターとスーパーコーディネーター、SEED化、ブレンパワードの抗体能力、ニュータイプ」

「わかった・・・完了だ、他にあるか？」

ん、あ・・・転生先の世界って・・・

「IS インフィニット・ストラトスだ」

ISかよ・・・。てっきりガンダムだと思っていたな。

「んじゃ、IS「却下」なんで！？」

「いまさらだけど、与えすぎだとあまり面白くないな」

そういう問題かつ！？

なんか嫌な予感が・・・。

「・・・と、いうわけだ」

「何がそんなわけだッ！！」

「逝ってらっしゃい。少年」

「待って　　って、うお！？」

足場がなくなり、最後まで言えなかった。

俺は落下しながら、何でこんな時に限って嫌な予感が当たるんだ？　と思つて意識を落とした・・・。

A c t - 1 (後書き)

誤字がありましたら、どうか指摘ください。

Act - 2

・・・転生してから10年が経過した。

この10年、色んな事があった。

生まれてから5年間は、意識がはっきりとしないことがあり、眠ってばかりだった。

・・・が、その間でもわかることがあった。

俺は、織斑 鷹夜 織斑家の人間であり、一夏の兄で当たり前
前に千冬の弟だった。

無論、二卵性双生児だ。

一卵性だったら面白くないのだろう・・・、という訳で俺は一夏とはまったく似ていない。

似てないどころか、ほんとにこれが自分なのか疑ってしまう姿だった。

何せ俺の姿は・・・目と髪の色が違うだけで間違いなく、ブレンパ
ワードの主人公、伊佐未 勇なんだから・・・。

「・・・よお、一夏」

「あ、おはよう。鷹夜兄」

ボサボサな頭をかきながらリビングに入ったら一夏がいた。
ちなみに、土曜の朝9時。

「千冬姉は朝からバイトだよ」

「ん？・・・そうか」

とりあえず、椅子に座ったら一夏からの報告。

「鷹夜兄は・・・いつもどおり？」

「あゝ、突然で悪いけどちょっくら旅に出るわ」

「え？」

「いや、なんかグウタラしてたら駄目になるから旅をしようと思っ
てな」

「バイトでためた金で何とかする。1週間くらいで帰ってくるつもりだ。もし1週間過ぎても何の連絡もないなら、そっちから連絡入れるか通報するかしてくれ。まあ、そんなことないと思うが念のためな？」

「わかった。けど千冬姉には自分で言つてよ？」

「・・・」

「言・っ・て・よ・ね？」

「・・・わかった」

・・・あまり気のらねえな

あの人のブラコンの症状はかなりひどい・・・。

特に俺に対して・・・夜なんか、寝るときなんかいつも無理やり一緒に寝たり、風呂に入ったり・・・。

この人、アニメでも漫画でも小説でもわかるけど、・・・ムチャクチャいい体つきしているから、寝るときなんかいつも抱き枕状態（

主に俺が）、その上抱きしめる力が半端ないせいで色々キツイ。
必死に一人で風呂に入るのと寝るのを交渉して一騒動あって、風呂
は一人で入れるようになり月に一度だけ一緒に寝るといふ条件でま
とまった。

それからは、まあ普通だな・・・
トルウウウウウガチャ

『どうした？鷹夜』

「千冬姉さん、俺旅に出るわ。1週間程くらい」

『・・・・・・・・理由を聞こうか・・・・・・・・』

やっぱり無理なのか？

「特にこれっていう理由は無いんだけど、ちょっとこの町以外にも
他の所も見てみたくてね・・・」

嘘です。何が嘘なのか自分でもわからんけど。アハハハハハ。

『・・・・・・・・わかった』

「本当！？」

『ただし無事に帰ってこいよ』

「当たり前だ、無事に帰って来れなかったら姉さんの言っ事を無条
件で3つきいてあげるよ」

何かあったら俺が困る、うん特に俺の身体が

『ッ！！本当だな！！男に二言は無いな！！』

「おっ、おっ」

何故そんなに食らいつくんだ織斑 千冬！！俺に何をさせる気だ！！
冗談抜きでマジ怖いよ！！

・・・まあいい、結果的に許可を貰ったんだ。
なら実行するのみ！！

東方やら博麗神社やら、前世の時にあったものが此処にもあって行
って見たかった。

前世では口々に何も見れやしなかったけど、今は口うるさい親はい
ない（口うるさい弟と姉がいるけど・・・）。バイトで溜め込んだ
お金があるから・・・多分、大丈夫だろう。

『・・・ところで1週間程過ぎたら私達はどうすればいい？・・・
一応聞いておくが』

「・・・電話してくれ。もし出なければ1分間隔でかけてくれ。も
し出ないときは俺の身に何かあったいうことで通報するなりしてく
れや・・・」

『わかった・・・気をつけてな』

「うん、ありがとう。じゃあ」

『ああ』

そういつて電話を切った。

「どうだった？」

「バッチ、グーだ」

「マジでか・・・」

「つい訳で、今日から出かけるわ」

「いつ？」

「んゝ昼くらいからにしようかな？まあ今日中に出るにはかわりないな。まあ姉さんが帰ってくる前だけだ」

「ん、わかった」

とりあえず、その話の後、ご飯を食べてから昼までゴロゴロしてから出かけた・・・

A c t - 2 (後書き)

・・・なんか、やってしまったなって感じですよ。

A c t - 3

気がつけば目の前を気泡がブクブクと浮かんでいった。

此処は・・・どこだ？

頭は覚醒し切れてないが自分がどんな所に居るのかはわかる。

周りには水・・・そして楕円状に歪んだ世界。

ガラス越しには白衣の人物が数名・・・研究者か？

それにケーブルが延びてる・・・。

って一体何が起きたんだ！？

ええつと、・・・ああ、確か途中の道のりの東京の成田空港で国際線で・・・フランス行きの奴に乗ろうとしたんだっけ？

そしたら、いきなり館内が騒がしくなって目の前に青い何かがつて言ってもISなんだよな。

それが落ちてきて・・・それが確かブレンパワードだったんだよな？

まあ、落ちてきたブレンパワードがなんというか青だったから・・・まあ、あれだな。

俺は伊佐未 勇と同じだから案の定ユウ・ブレンなんだろう・・・。とかくブレンを何となく触れてしまって、案の定起動してなんかいつの間にか取り込まれていて、何故か自分の意思と関係なく飛んでしまったんだよな？

そんで暫く飛んでいたら、ブレンが強制的に俺の意識をブラックアウトしてしまっただよな・・・。

なんか、何かに怯えていたって言うかなんと言うか・・・必死に逃げようとしていたな、ブレンの奴・・・。

・・・で俺はこんな所で何をやってんだ？まあどうしようもないけ

どね・・・。

そして、姉さんや一夏は心配してるだろうな・・・。
なんか、眠いな・・・。

Side ?

数日前、我々が独自に製造したIS『アンチボディX』が無人の状態で起動し、とある方角に飛び去った。

それはあまりに突然で対応ができなかった・・・
アレを今までに誰も起動させたことが無かった。

だが、アレは自ら適合者を探し出し、見つけたのだが・・・まさかの有名な織斑家の人間だとは・・・。

そして、同時に開発していた『アンチボディH』の適合者も見つかり、すでに訓練をかねたデータ採集を始めている。

だが、まさかと思ったが我々が経営している孤児院の長女でまとめ役の彼女だったとは・・・。

しかし、ISに自我があるのは知っていたが此処まで自ら動くISは多分いないだろう・・・。

それに此処まではつきりしているとは・・・興味深いな。
・・・そろそろ、Xの回収に彼女達を出すか

「チーフ、命令通りHをXの回収に出させました」

「ん、わかった」

「しかし大丈夫でしょうか・・・」

「大丈夫、危険を感じたらすぐに帰ってくるように言っている」

「そうですか・・・まあ、彼女なら大丈夫でしょうね」

「それにバイタル・ジャンプも使えるらしい・・・」

「！だったら大丈夫ですね」

「・・・だが、Xの適合者」

「・・・織斑 鷹夜君のことですか？」

「ああ・・・もともと彼以外にしようと思っていたが、やはり運命なのかな？」

「そうだとっても私達ではどうしようもないことでは？」

「そうだね・・・彼らの到着を待とう」

「はい・・・できれば奴らと会わないことを」

1時間後。

「チーフ!!」

「!?!?なんだね」

「彼らが帰還しました。しかし奴らと遭遇し、何とか逃げ切ったが織斑君が戦闘により右目と右腕を損失!織斑君は意識が無く、彼女は満身創痍の状態です。一応、応急措置として治療ポットに」

「そう・・・アンチ、いやブレンパワードたちは?」

「Hは無事なのですが、Xは織斑君と同じ状態ですが・・・バイタル・ジャンプで損失した右腕と右目を取りに行ってます・・・」

「・・・全く予想外なコトだらけだな」

「ええ。それとXと織斑君の適合率が・・・」

「Sランク以上の数値、か・・・余裕で彼女達を超えてるな」

「はい・・・」

「・・・両方とも、予想外だな」

「Xが帰還しましたら急ピッチで治療を開始します」

「わかった」

「・・・私達はもしかしたら、世界を変えてしまうような者達を引き

合わせているのかもしれない

もしそうだとしたら、私達はこれからとんでもない者達を見ていく
のだろう・・・

このとき、私はモニター越しに移る彼らを見ながらそう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5690t/>

I S インフィニット・ストラトス Revolution 転生者の意思(仮)

2011年9月2日17時45分発行